

## 第一回俳句賞「25」選考報告

選考委員は西村和子、岸本尚毅、高柳克弘の各氏。計三十七作品について、特選一編、入選三編の予備選考を行い、特選二点・入選一点で集計した。

番号	表題	西村委員	岸本委員	高柳委員	得点
8	蒼き呼吸		○	◎	3
11	むし・けもの	◎	○		3
34	屈折率	○	◎		3
33	後日譚	○	○		2
9	流星群			○	1
24	エトワール	○			1
30	凍て土			○	1
32	ジャスマンティ			○	1

三月十八日（日）、新宿区立漱石山房記念館・講座室において公開選考会が開催され、各作品について討議が行われた。当日は、実行委員会の所属学生俳句会（慶應義塾大学俳句研究会、筑波大学俳句会、東大学生俳句会、早稲田俳句研究会）および協賛学生俳句会の一部（金沢大学俳句会）による活動紹介も行った。

高柳委員入選の「流星群」は、〈星月夜大声で歌ったっていい〉〈冬日和それいけ雑巾がけレース〉など、若々しさが内容・調べの両面で表現されている句が評価された。〈若葉風先生までクラスTシャツ〉〈無造作な教科書の山にパイナップ

ル〉などは語順や助詞の検討をすることによって、内容とリズムが合致するとの助言もあった。〈公式を書き終えただけ桜餅〉〈椿落つささいな計算ミスひとつ〉〈鯛やただだ日々を浪費する〉は季語と場面が一見関係しないようだが、「桜餅」も実は「公式を書き終えただけ」のようなものではないか、など季語によって連想が膨らむ点が楽しいという評もあった。

西村委員入選の「エトワール」は、〈おしやべりの呼吸糸糸を編む呼吸〉〈教壇で伸びる教師水温む〉など、日常のふとした瞬間・発見を切り取り韻律にのせた手柄が評価された。〈書きかけの楽譜散らばり冬薔薇〉〈おほかみの墨色のこゑ響きけり〉など詩的感覚のみずみずしい句も支持を集めた。また、〈入学や母から子へのレシピ集〉など、季語に新たな切り口から挑戦した句も評価された。一方で、〈ひらがなの宝の地図や雲の峰〉など型にはまった表現や、「水温む」「風光る」「風薫る」など無難な季語の頻用などが指摘された。

高柳委員入選の「凍て土」は、〈ジャケット脱ぐ働けばとりあへず大人〉〈雪達磨醜き凹凸も愛す〉〈プレゼントにかかりし雪を払ひけり〉など、若者ならではの複雑な心情や初々しさが読み取れる句、〈ぬめる者全て寝てをり寂しき冬〉〈口に雪を挟みし鳥跳ぬ〉など細谷源二や斎藤玄ら北方系の重量感ある俳句の伝統が感じられる言葉遣いの句が評価された。一方で、〈答案の右角折りて冬始む〉〈茅葺を重うせしむる冬の雨〉など、言葉遣いに無理があることも指摘された。しかしタイトルを含め全体的に自分たちの冬の息遣いが描かれていることから、審査員三氏ともに読み応えがあると評価した。

高柳委員入選の「ジャスマンティ」は、〈しゃぼん玉吹かう運命変はるから〉に始まる軽やかで明るいトーンの商品群のなかで、〈ぬばたまの月夜のバイクシヨップかな〉〈数学に晩夏のジャスマンティぬるし〉などパターン化しやすい取り合わせの手法を工夫して用いた句が評価された。〈霞草ひかり抱くごと受け取りぬ〉〈はつ夏の光に濡るるレースかな〉〈マネキンの脱がされて夏了るらし〉など、実感に基づく端的な把握の句もありながら、〈静寂を二乗するよな冬の月〉

〈水鳥やだだ一輪を残しけり〉など、定型詩における表現が洗練されきっていない句もあることを惜しむ評もあった。

西村委員・岸本委員が入選で推した「後日譚」は、〈石鱈玉言葉は意味へ急ぐなり〉が、季語や実感を信頼して、一見観念的な内容を意欲的に詠み込んでいる点で評価された。〈セロリ刻めば一人で町に在る心地〉〈百千鳥お歌のやうな喧嘩のやうな〉〈花冷えや無様な塗り絵のやうな街〉なども、屈折感が巧みに表現されており、支持を集めた。〈みどり児のこむら返し冬木道〉の安定感も評価された一方、〈石鱈玉〉のやうな危うい方向性を追究した方が良いとの助言もあった。〈禁厭が身近な祖母や柚子を濾す〉〈アリーブイなき日々々の代価として檸檬〉はその冗長さや主観の強さが指摘された。

高柳委員が特選、岸本委員が入選で推した「蒼き呼吸」は、〈雨に影しつかりとある冬菜畑〉〈風の果てに卵の販売機〉など、現実を堅実に描写しつつも、どこか虚の世界を思わせる作品が評価された。〈酢茎買ふ頬骨の出た男から〉〈横たへて夜の昏さの氷柱かな〉など謎の多い世界観や、〈ゆく年や画鋏に残る切れつ端〉のさりげなく情のこもった句も支持を集めた。〈冬ざれの一片として掛かり舟〉〈帰るでもなくて羽子板市のなか〉などの巧みな句もあった一方で、〈杉蘇の蒼き呼吸やクリスマス〉の中七の「や」が効いていないことや、〈毛糸編む鎖骨のうつくしく動き〉の類想感も指摘された。

西村委員が特選、岸本委員が入選で推した「むし・けもの」は、〈図書館を出られなくなる秋の蝶〉〈父帰る音にまぎれて茶立虫〉〈深山に陽を見上げている狐あらん〉などの、小さいものやほかないものへのまなざしのあわれが出ており、統一感があることが評価された。新鮮さも話題となった一方、高柳委員からは〈昼休みみみかんの筋を取れば終わる〉について語順の推敲がまだ足りていないことや〈マフラーの色が感染女学校〉は「感染」がやりすぎなのではないかという指摘もなされた。

岸本委員が特選、西村委員が入選で推した「屈折率」は、〈怒濤以後みな新しき日陰かな〉の危うさを伴う新鮮さ、〈燈籠の揺蕩ふうちに雲流る〉の下五の巧みさ、〈記憶では私首振り扇風機〉のてらいのない清々しい表現に言及があった。〈読了の涼しき寺の月を見ぬ〉は完了の助動詞「ぬ」が否定の助動詞「ず」の連体形に混同されることが指摘されたが、「読了」という言葉の幹旋を岸本委員は絶賛した。〈暖かやトムもジェリーも出す目玉〉は面白すぎるという指摘や〈子を迎へけり七輪の初秋刀魚〉は連作の中で浮いているという指摘もあった。

最終的には、高柳委員の提案で、全員が「蒼き呼吸」「むし・けもの」「屈折率」から二作品ずつに投票し、得点の高かったものを大賞とすることになった。全委員が「むし・けもの」に、西村委員・高柳委員「蒼き呼吸」に、岸本委員が「屈折率」に一票ずつ投じ、結果「むし・けもの」が大賞、「蒼き呼吸」「屈折率」が奨励賞に決定した。

その後、各選考委員の秀逸十句選の発表・講評ならびに総評があった。俳句のみならず短歌・詩・小説など他分野の文学作品に触れて知見や感性を深めること、俳句を愛し、息長く続けることの重要性が語られた。季語に関しては、「動く・動かない」と言った見方だけではなく、他の季語にするかどうかのように句のニュアンスや印象が変わるかを楽しむ観点もあって良いのではないかと指摘された。また、選者が見逃した秀句もあり、作者一人ひとりが自分を信じて作り続けるべきとの助言もあった。さらに、俳句は内容だけではなく、表現や調べが肝要であるとの指摘もなされ、提出前にもう一步工夫できる点がないかを点検し、今一度声に出して自作を読むことが大切だとされた。

最後に、観覧席からの質問・発言の時間を設けた。二校以上の生徒が一つのチームを組み、異なる学校の生徒の句が秀逸句に選ばれるなど、本賞ならではの特徴が指摘された。仮名遣いや文語・口語の統一が必要かという質問に関しては、これは作者一人ひとりの選択次第なので、統一は不要という見解が大方であった。また、「二十五句の統一性が必要か」という質問に対しては、選考委員から「単純に秀句が多ければ良い」「統一性があるものも、多彩な作品が集まっているものも、それぞれ魅力がある」などの回答があった。